

博物館だより

第93号 2015.3.27



銅造菩薩立像 関山神社蔵

善光寺の創建と善光寺信仰の開花

—「信仰のみち」展の着眼—

善光寺創建と善光寺信仰は別の議論

信濃善光寺については、善光寺の創建に関する研究と、善光寺信仰の始まりに関する研究が混在しており、このあたりの整理が必要と思われる。

善光寺の創建以来、いわゆる善光寺式阿弥陀如来像に対する信仰、—これをここでは善光寺信仰と言い表すことにする—があったとする見解もある。ただ、ここでは善光寺創建の時期と善光寺信仰の始まりとを別に議論すべきとの立場から述べたいと思う。

善光寺創建をめぐる新たな視点

善光寺創建の時期については、これまでには、善光寺旧境内出土の軒丸瓦の文様から、その年代観をあてはめてきた。しかし、考古学的手法からすると、こうした型式論のみに依拠することは極めて危うい。遺物は遺構に伴ってこそ初めてその性格を論じることができるのである。逆を言えば、遺物は単体では歴史を語らないのである。

とは言うものの、これまで善光寺旧境内地の発掘が行われており、報告書も刊行されて

いる。発掘から年月を経た今日、この報告書の落穂拾いを試みたい。

注目すべき一点目は、武家政権成立期に善光寺が大幅な改修工事をうけているということである。発掘によって、強く固められた土台が出土したのである。そしてこの年代観は、鎌倉時代の初めという。

二点目は、善光寺境内で初めて古代の仏像が出土したことである。報告書でも塑像の可能性が指摘され、前回の善光寺御開帳記念の特別展示「女たちと善光寺」においても紹介されていた。しかし本展示開催にあたり、大津市歴史博物館の寺島典人学芸員より本塑像を検討いただいた結果、七世紀後半の塑像である可能性がきわめて高いことの指摘を得た。詳細は展示図録の寺島氏の寄稿文を参照いただきたいが、とすると、善光寺創建期の仏像である可能性が大きく、その成立が少なくとも奈良時代以前であると言える。

また、この塑像の出土状況も示唆的である。まず、火災にあっていることである。古代のある時期に善光寺が火災に見舞われたことがわかる。加えて、火災にあった塑像は、鎌倉時代の再建の際には、伽藍の端に払われたのである。これらのことから、古代の善光



善光寺仁王門東地点出土 塑像 長野市埋蔵文化財センター蔵

寺とは異質の新たな中世善光寺が現れたことが分かるのである。

三点目は、長野市内で初めて文字瓦が出土していることである。

文字瓦が出土していることは報告書にも記されているが、詳細は論じられていない。一般的に文字瓦は、人名や地名を示すとされている。報告書では、「咸」と「七十七」という文字としているが、「七十七」は「艸」にも読める。ただ、今後の検討が必要ではある。

文字瓦の出土は、善光寺の創建が単に私寺建立という範疇にとどまらず、もっと大きな行政組織による造営であったことを示す。これまでも善光寺造営に瓦を供給した窯跡は指摘されてきたが、瓦の生産が首長の主導のもと行われていたことが想定できるのである。善光寺はきわめて官寺に近い、もしくは官寺として造営されたことを意味する。

善光寺境内発掘調査の成果の落穂拾いを試みた。ここでは、これまで知られていなかった善光寺の創建事情を示唆する資料のあったことを述べた。

善光寺信仰の形成と武家政権

先に述べたとおり、善光寺信仰は鎌倉幕府という武家政権の成立と極めて密接な関係にあった。武家政権の創始者である源頼朝による善光寺再建（創建）と善光寺への参詣は、鎌倉幕府の御家人はもとより、新たな政権の担い手であった武士たちに大きな影響を及ぼ

したことは確かである。これ以降、善光寺本尊を模した金銅仏や板碑が各地でつくられるようになった。これを以て、善光寺信仰の始まりを確認することができる。

地方武士たちが善光寺式阿弥陀三尊像を造像していたことは、各地に残る像の銘文からも明らかである。全国に善光寺式阿弥陀三尊像の残るのは、こうした理由からである。

一方、関東に花開いた板碑の文化のなかにも善光寺信仰を確認することができる。金銅仏と板碑とは比較的近い時期に作られ始めるが、その容姿に違いがみられる。おそらくは、造像にあたって手本となったものが違っているのだろう。ただ、その手本の違いについては結論を見出すことはできない。

関東で広まった女人救済 —武家政権の変容の陰で—

善光寺が女人救済の寺であり、これが善光寺信仰の特質であることは夙に知られた事実である。しかし、その具体的な様相は史料の豊富な江戸時代にならないと検証できない。ただ、ひとつ興味深いのは、関東の板碑の変容である。

戦国時代になると、「善光寺時供養」なる板碑が現れる。そしてこの板碑には女性の名前が掘り込まれており、女性の結衆板碑であることがわかる。「時供養」の解釈は難しいが、女性のための善光寺信仰のあったことを示



善光寺大本願 明照殿地点出土
文字瓦 長野市埋蔵文化財センター蔵



善光寺式阿弥陀三尊像（宝治3年・1249） 向徳寺蔵

すものである。

戦国時代にあらわれたこうした女性と善光寺の関係を示す史料は、おそらく、善光寺信仰の変容をも物語っていよう。それまで善光寺信仰が武士たちの間でのものであったが、

戦国の内乱期には、女性信仰へと浸透し、かつ、変容していたことを物語る。

戦国時代における変容は、江戸時代に花開く善光寺信仰と女人救済の萌芽であったと言っておきたい。

善光寺信仰を取り巻く信仰 —山岳信仰とのかかわり—

善光寺を取り巻く周辺の寺院には、多くの山岳寺院があった。戸隠、飯縄、小菅、斑尾、妙高などである。特に妙高山を信仰対象とす

る関山神社には、非常に古い金銅仏が伝わる。古代以来の妙高山に対する信仰を物語っている。(表紙写真)

北信濃から北陸へと新幹線が開通した。この路線は、換言すれば信仰のみちである。本展示が、この地域を理解する一助となれば幸いである。(原田和彦)



善光寺式阿弥陀三尊像画像板碑（建長4年・1252） 個人蔵



善光寺時供養銘板碑（大永8年・1528） 医薬寺蔵

同時開催「狐にまつわる神々」から、 飯縄権現像のヒミツを解明する!

善光寺平の背後に鎮座する飯縄山の飯縄権現（飯縄大明神）ⁱをご存じですか？狐に乗った烏天狗という怪異な姿についてはこれまで謎とされてきました。本展では飯縄権現の姿（図解参照）の秘密にせまります。

飯縄権現は『戸隠山顕光寺流記』（長禄2年・1458、戸隠神社蔵）に「日本第三の天狗であり、戸隠の鎮守である。飯縄山で尊崇されるので、飯縄大明神と号する」と書かれます。また、『飯縄山廻祭文』（天文15年・1546、滋賀・叡山文庫蔵）には、天竺（インド）から十人の王子（天狗）が白狐に乗って渡来し、三郎王子（智羅天狗）は信濃国戸隠飯縄山に住むことになったと書かれます（ちなみに、太郎王子は愛宕山、二郎王子は比良山、四郎王子は富士山、五郎王子は白山、六郎王子は熊野大峰山、七郎王子は羽黒山、八郎王子は大山、九郎王子は日光山、十郎王子は金峯山という、そうそうたる修験の霊場が並んでいます）。これらから、飯縄権現は白狐に乗った天狗であることが分かります。

また同じ『飯綱山廻祭文』には、「飯縄大明神の本地は大日如来であり、教令流布身が不動明王である」（飯縄大明神は、大日如来、または大日如来が憤怒の姿で現れた不動明王が本来の姿である）と書かれ、飯縄権現は不動明王と関係していることがわかります。

不動明王は平安時代後期より盛んとなった修験道の主要な本尊であるので、飯縄権現も修験の信仰の中から生み出されたと想像されます。冒頭で紹介した『戸隠山顕光寺流記』に飯縄は戸隠の鎮守であると書かれるように、二つの霊場は室町時代頃まで一体となって信仰を集めていたことが知られます。戸隠には不動明王を取り付けた鏡《銅製不動明王御正体》（平安時代12世紀、個人蔵）が伝来していて、平安時代後期頃の戸隠・飯縄地域の修験道の遺物だと考えられます。

こうした修験道における不動明王信仰を背景として、室町時代に突如として現れるのが

飯縄権現です。この時期、飯縄山は戸隠山から独立する形で、独自の本尊を祀るようになったようです。

そこで登場するのがダキ二天ⁱⁱです。ダキ二天はインドの夜叉女神ダーキニーが、密教に取り込まれ、両界曼荼羅の中で「荼吉尼衆」として人の手足をむさぼり血の杯を干す姿で表されます（両界曼荼羅が日本にもたらされたのは平安時代9世紀）。経典では、ダキ二天は人の命が終わる6ヶ月前にその時を知り、先に「人黄」という人間の最も大切なもの（魂のようなもの）をとって食べてしまうとされます。このような性格から、鎌倉時代にはダキ二天の法は外法として恐れられ、かの平清盛も行ったとされます。さらにその強大な力から、中世には天皇の即位に際して高御座に上る直前、密かにダキ二法が行われ、天皇はダキ二天と一体となることによって天下を治めるとされました。

ダキ二天はインドではジャッカルを伴っていたため、日本ではジャッカルに変えて狐を伴うと考えられました。この狐を媒介として、鎌倉時代14世紀頃から稲荷大明神とも交流し始め、中世神仏習合期の女神として暗躍します。

さて本題に戻って、飯縄権現とダキ二天との交渉ですが、中世末に成立したと考えられている『稲荷大明神祭文』（広隆寺旧蔵）の「吒枳尼天法」の中に「南無飯綱大白狐白山成就来向」という一文があります。さらに、江戸時代17世紀頃の成立とされる『稲荷五所大事聞書』（高野山伝来）の「日本七所大陀天」に「信乃戸隠大明神」と書かれます。また顕光寺（戸隠神社の前身寺院）第55代別当乗因（享保12年・1727より別当）による『戸隠山神領記』には「飯縄明神荼吉尼天」と記されます。これらから、飯縄権現とダキ二天との関係が浮かび上がり、飯縄権現が乗る白狐はもともとダキ二天のものであったことが想定されます。

さらに、飯縄権現を特徴づける嘴と翼は、^{くちばし}仏教で信仰される空想上の鳥、迦楼羅を表し、両手足首にからみつ^かく蛇は、老人の頭を持つ蛇・宇賀神と結びつき、福德性を増した弁財天、すなわち宇賀弁財天を表しています。これらの迦楼羅と宇賀弁財天は、室町時代15世紀頃、ダキ二天と習合（合体）して、三天合形像^{ごうぎよう}という強大な力を持つ尊像になっています。この三天合形像は、息災安穩・商売隆盛などの福德の願いとともに、武運長久という願いもこめて創られたことが分かっています。こうした軍神としての側面も持つ^{いくさがみ}ダ

キ二天が、不動明王を主尊とした修験道の霊場であった飯縄山に入り込み、生まれたのが飯縄権現像ではないでしょうか。

飯縄権現の軍神としての側面は、戦国時代に川中島で激突した武将、上杉謙信と武田信玄の両雄がともに信仰したことで知られます。江戸時代太平の世になると、中世では隠れていた性格、火伏の神という面で信仰されるようになりました。今回の展示が、信州飯縄山発祥で北信が誇る尊像でありながら、謎に包まれてきた飯縄権現像の秘密を解き明かす一助となれば幸いです。（専門員 竹下多美）



《銅造飯縄大明神像》応永13年（1406）、松代・永福寺蔵

図解



(カッコ内は推定されるイメージソースを示す)

ⁱ 飯縄の名称については、現在発行されている国土地理院の地図では、山の表記を「飯縄山(飯綱山)」、町名は「飯綱」としています。本展では、現存最古の年紀を持つ松代・永福寺蔵の《銅造飯縄大明神像》の刻銘「□縄大明神」、及び佐久市安養寺蔵の『信濃安養寺年中諷経回向』(「修正満散疏」、応永16年・1409年紀)中の「飯縄大明神」という記述を尊重し、「飯縄」の表記を採用しています。

ⁱⁱ ダキ二天の尊名表記に関しては、サンスクリット名の「dha-ki-ni」の当て字で、「荼吉尼」「吒呾尼」「拏吉尼」など様々な表記があり統一できないので、むしろカタカナ表記としています。

博物館のHPアドレス

<http://www.city.nagano.nagano.jp/museum/>

長野市立博物館

〒381-2212 長野市小島田町1414
TEL:026(284)9011

戸隠地質化石博物館

〒381-4104 長野市戸隠栃原3400
TEL:026(252)2228

鬼無里ふるさと資料館

〒381-4301 長野市鬼無里1659
TEL:026(256)3270

信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館

〒381-2404 長野市信州新町上条88-3
TEL:026(262)3500

ミュゼ蔵

〒381-2405 長野市信州新町37-1
TEL:026(262)2500



▲長野市立博物館
携帯サイト

